

NPO法人タ立山森林塾

調査団体名 : NPO法人タ立山森林塾
 設立年 : 2006年1月1日
 団体URL : <http://yudachiyama.sub.jp/>
 活動拠点 : 恵那市山岡地区
 取材日 : 2015年 12月 9日

団体代表者名 : 佐藤大輔
 対応してくれた人の名前 : 佐藤大輔、高草武臣
 調査員 : 近藤朗、浜口美穂、石原淳
 レポート作成者 : 石原淳

活動(事業)内容

特定非営利活動として主に以下の事業を行う。

- ①自然環境の保全にかかわる教育・啓発事業
- ②自然環境の保全にかかわる広報事業
- ③森林および地域文化情報の収集・提供および調査研究提言事業
- ④森林および地域文化研修・講習会

キャッチフレーズ

森・里・人が元気につながる



やまおか木の駅・薪の駅

会のモットー(何を大切にしているか)

各種講座・活動を通じて、森づくりの大切さを訴え、森林ボランティアを育成し、素人山主に安全で科学的な山仕事の愉しさを伝えることで、地域の森林再生のみならず、山村の活性化をめざすものである。

設立から現在に至るまで変化したこと

◆設立前～設立初期(2005年～2008年)・・・森の健康診断リーダー養成・山村の人材育成が主たる活動の時期

2005年10月に第1回土岐川・庄内川源流の森の健康診断が始まり、森の健康診断リーダー養成と山村の人材育成のためタ立山森林塾が始まった。2008年までに塾生を100名輩出し、塾の幹部や関係団体の主要な役職に就くなど一定の役割を果たした。そのため、一度は団体を解散する話が出た。

◆設立中期(2008年～2013年)・・・木の駅の運営が主たる活動の時期

2009年土佐の森・救援隊を視察し、地域通貨『森券』を活用した間伐材の有効利用を標準化することが検討され、実働部隊である「杣組(そまぐみ)」とともに本団体が運営の主体を担うことになった。同年12月に恵那市中野方(後の笠周)において木の駅プロジェクトの社会実験が行われ、9戸56tの丸太が集まり、森券で地元商店街も潤うことが証明できた。その後、全国第1号となる木の駅が本格的に始動し、会のモットーである山村の活性化が図られた。2011年より、笠周木の駅は「笠周木の駅実行委員会」に委ねられ、サポート的立場に退いた。その後、山岡地区で新たな木の駅を立ち上げ、花白温泉に薪ボイラーを導入した。この頃から活動の拠点は、北部の笠周地区から南部の山岡地区に移った。

◆現在

現在は、木の駅のサポート的立場を続けながら、恵那市の委託による「市民講座(間伐講習)」「森林体験イベント」を開講・開催している。また、株式会社BESSのCSR活動や株式会社リコーの社有林「リコーえなの森」の環境保全活動の支援を行っている。恵那市と連携協定を結んだ名古屋大学に対しては、「臨床環境学」の現地コーディネート(地元住民とのコンタクト)の支援など、地域・社会貢献の幅が広がっている。

連携している団体・専門家・自治体など

- 【官】 国土交通省、環境省、岐阜県、恵那市(素人山主の育成事業)
- 【民】 豊森なりわい塾、地域の未来・支援センター、NPO法人地域再生機構、株式会社花白温泉、NPO法人杣の杜学舎、株式会社BESS(CSRの支援)、株式会社リコー(社有林の環境保全活動の支援)
- 【学】 名古屋大学(2005年5月恵那市との連携協定を締結。森林活動を主とする現地コーディネート)

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

- ・木の駅プロジェクトのサポート・主動(笠周地区・山岡地区) ・間伐講習の実施(恵那市からの委託)
- ・民間企業のCSR支援 ・民間企業の社有林の管理支援 ・大学との共同研究・支援

現在直面している課題

これまで、目先の課題をこなすことに追われてきた。設立10年を機会に、一度立ち止まってこれまでの活動の反省と今後の活動の着地点を見据えたい。特に、これまでの活動は、目の前の課題に対して受動的な立場をとってきたが、今後は主体的に取り組みたい(主体的に取り組む対象をみつけない)。

今後やってみたいこと

- ・林野庁が行っている「森林・山村多面的機能発揮対策交付金」などのように、申請書類や報告など地元住民にとって作業困難な事務作業を支援したい。
- ・移住者との連携を深めたい。特に、移住を考えている人や地域の発展に危機感をもった人々を支援したい。現在は「夕立山森林塾」であるが、いずれは「夕立山山村塾」のような、より広い範囲で活動と支援を行いたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

これまでの人脈を大切にしながら、現状に固執することなく、新たな人脈を築きたい。それには、恵那市だけでなく、長野県(根羽村ほか)や愛知県(豊田市ほか)などの流域の団体と連携することが大切だと考えている。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 連携する団体への支援活動は大変でしょう？

<答え> 『楽しいです！』

その他、伝えたいこと

- ・山村における課題は、山村だけの問題ではありません。流域全体の問題だと思います。
- ・人のつながりがあれば、なんでもできると思います。我々は、矢作川流域圏の皆さんと連携したいと考えています。是非、よろしくお願いします。

写真



佐藤大輔さん(代表)と高草武臣さん(事務局)



間伐の実演



薪ボイラーを活用する花白温泉



取材風景